

やれと言われたらやる

第8期生 岩崎 裕士

2年間、小野ゼミでの活動を通して何が身に付いたかと言われれば、「やれと言われたことを言われた日までに確実にやる」ということだ。2年もいてそんなことしか身に付かなかったのかと言われればそれまでだが、目の前にある課題や仕事をミスなく、期日までに確実にこなすのは、案外難しいことではないかと思っている（実際、今でも全てのことを期日までにできているわけではない…）。

昨年度は、『マーケティングマネジメント』をはじめとする基礎文献レポート、SAS レポートなど、毎週のように提出期限に追われていた。6月に「イベント」があり（7期の先輩方、そして同期に迷惑をかけてしまい申し訳ないです）、レポート類の提出が多少遅れてしまったこともあったが、なんとかこなすことができた。また、今年度は、夏ケースや卒論の中間提出など、昨年同様に提出期限が定められたものがいくつもあり、これらもなんとか間に合わせることができた。夏ケースに関しては、完成していないにもかかわらず、合宿前日に自分とピンチヒッター荻野以外作業できないことが判明し、死ぬほど焦った。本当に焦った。しかし、そこで文句を言ってもしょうがない（ウソです、めちゃくちゃ文句言いました）。是が非でも合宿前に印刷まで完了させるために、荻野と横浜まで行って小野先生のご指導を賜り、なんとか完成にこぎつけることができた。小野先生からGOサインが出た瞬間、雄叫びをあげたくなるほど興奮したことを憶えている（大量の印刷の作業に協力してくださった大学院生の千葉さん、ありがとうございます）。合宿に向かう道中で、たった3人でパソコンと格闘…という最悪の事態を回避できて、本当によかった。

思い出話はこれくらいにして、小野ゼミでの2年間は、ある意味、期限との戦いであったと思う。ケース、ディベート、三田論、卒論…とにかく多くのことを期限までに形にし、消化してきた。はじめは手探りの状態で、何をするにしても時間がかかった。それに、何のためにこんなことをしているのだろうと疑問に思うこともあった。それでも、自分に課された課題を確実にこなすことで、少しずつではあるが、ペースをつかみ、自分がやっていることの意味を理解できるようになった。この2年間、ガムシヤラにゼミ活動に取り組んで分かったことは、「四の五の言わず黙ってやる」ことがどれほど大事かということだ（でも、文句はしょっちゅう言っていました…）。それに気付けただけでも、小野ゼミに入った意味は十分あったのではないかと思う。

最後になりますが、毎度のように文句をぶーたれる自分を受け入れ、時には苦言を呈してくれた同期、こんな自分を先輩扱いしてくれた9期、「イベント」の時に引き留めて下さった7期の先輩方、大学院生の先輩方、そして、こんな不出来な私を最後まで指導してくださった小野晃典先生、2年間本当にありがとうございました。